脱獄犯(10歳)のヒーロー(には絶対なれない)アカデミア

yakitori食べたいね

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

５歳からタルタロス収監レベルの犯罪者系オリ主が脱獄して自由に生きようとする話。

ヒロアカの世界線では『個性』と人格形成には間違いなく関係性がありますよね。

トガちゃん然り、弔くん然り。

なのでオリ主も生まれながらにして倫理観バグった系ボーイで行こうと思います。

目　次

『タルタロス』……『タルタルソース』みたいだね　1
相澤先生万能すぎて原作弱体化受けまくってて草生える　5
体育祭がオリンピックの代わりとかw　10
少年ジャンプ（した後）　15
体育祭　僕は行けない　悲しいね　20
焼き肉って美味いよなぁ。み●を　25
結局ＡＦＯの本名って死柄木なんなん????　32
林間学校…行ったことないンゴ…　38
虎柄のおばちゃん怖いンゴ…　46
うわっ…僕への信頼なさすぎ……？　54
成り行きな行動は身を滅ぼすってよくわかんだね。　60
逃げて、逃げて、救えない　65

『タルタロス』・・・・・『タルタルソース』みたいだね

物心ついた時には小さな部屋で本とおもちゃとドアだけがある部屋だった。

たった一つだけある金庫の扉みたいなのについている小さな窓から1日三回食事を与えられて、部屋に置いてある本を読んでおもちゃで遊んで、たまに貰えるヒーロー特集という雑誌を読んだり、時々くる大人の人と喋ったりしての繰り返しの日々だった。

そんなことが1ヶ月?半年?もしかしたら1年以上経っていたかもしれないけど、時間の感覚がご飯しかない僕にはそんなこと考えても無駄だった。

ある日突然頭の中に知らない人の記憶が入ってきた。

その中では色んな人たちが楽しそうに暮らしていた。

それを見て僕は少しだけ、たった少しでも羨ましいと感じてしまったんだ。

だからここから出して欲しいことをたまにくる大人の人に伝えた。

そうしたらその人は困ったように笑って誰かに連絡をしていた。

きっとここから出してくれるのだろうと期待していると

次に目が覚めた時は椅子の上で拘束されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・なんでさ。

しかも少しでも動こうとすれば銃口が向いてからおまけ付き。

こんな物は望んでいないと僕がいうと、知らない人が返すものは罵詈雑言と殺意だけだった。

こんな純粋無垢な子供を監禁している人がそんなことを言う資格があるのだろうか。

全く仕方のない人だ。

そんなことを思っていたり、記憶の中にある漫画から自分の『個性』と似ているものがないかな。
などと考えているといつのまにか知らない人から1ヶ月ほどの座りっぱなしが終わっていることが伝えられた。
やっと動けると思って拘束を外されて立とうとしたら立てなかったのだ。
なるほどしばらく動いていなかったから筋肉が衰えたり感覚がおかしくなっているのかな、などと僕は考えた。
そこで『個性』を使い、自分の足を回復させると動けるようになった。
銃口をまた向けられてしまったが知らんこっちゃない。
こっちは座らせっぱなしだったのだ。
多少の自由は与えられるべきだろう。
そんなことを考えて知っている大人の人に連れられて元の部屋に戻った。
……　別に外に出してくれるわけじゃないのね。
そんなこんなで部屋での生活は以前のものに戻ってしまった。

そこからまた暫く月日が経って、『個性』を使わなくてもまともに体が動かせるようになった。
今日は珍しくヒーロー特集という記事を貰った。
今までも時々もらうことができていたのだがこれまで貰えたものと違って
「雄英高校体育祭今年も開催！」などのような見出しが書かれていた。
以前まで貰えていた物は「大型新人、Ｍｔ．レディ活動開始！」と言った特定個人に対してのものばかりだったので初めてのイベントについて書かれたものだった。
雄英高校とは何のことかを雑誌を渡してくれた人に聞くと彼が勤めている高校のことで体育祭とはこの国で一番大きなスポーツのイベントのことだという。
オリンピックのようなものかと聞くと大体そんなものだと答えて

くれた。
というかいつも僕に会いにきてくれている彼は先生だったのか……。
そういえば僕は彼の名前も知らなかったことを思い出し、聞いてみた。
彼はヒーロー名が『イレイザーヘッド』で本名を『相澤消太』というらしい。
ではこれからは相澤先生と呼ぼう。
というと先生はすぐに眉間に皺を寄せて、気難しそうな顔をした。
僕はそれを笑ってしまい、また眉間の皺が深くなった。
これを機に彼と仲良くできたらいいなと僕は思った。
いっそのことだし今まで知らなかった外のことやこの施設の名前を聞いてみた。
ふむ…『タルタロス』か…。
どこかで聞いたような気がするが、まぁ覚えていないのだからどうでもいいことだろう。
僕が何かを考えていることを察したように見える相澤先生は不機嫌そうな顔をしていたがこちらを向くとすぐにその顔をやめた。
そうやって先生と話しているうちに大分時間が過ぎてしまったようで先生は帰る支度をし始めた。
その後帰ろうとする先生に
「雄英体育祭、観れるようにしてやるよ」
と言って、先生はニヒルな笑みを浮かべていた。
そこから何も喋らずに先生は帰っていった。
どでかい扉が閉じられて完全に1人になった。
完全に先生がいなくなったことを確認して、僕は思考を緩ませた。
やっぱり相澤先生は「綺麗」だったなぁ。
「流れ」が技術のある人のものだ、と言っても彼以外にまともな人を見たことがないが。
うん、見よう。体育祭。
あんな人がオススメするくらいなのだ。

きっと素晴らしいものなのだろう。
そう考えて、正直ダメ元で未だに声しか聞いたことのない僕を椅子に拘束した人に体育祭を見させてくれと頼むと、意外なほどあっさりと許可が降りた。
理由を問うと、「ヒーロー活動に関連していることならいい」とのことらしい。
???全く意味がわからない。
まぁいいだろう、運がよかった。
そういうことにしておこう。
今からでも『体育祭』への期待が収まらない。
早く早くと珍しく物欲が出ている。
ここで暮らしているうちに欲が薄れて来たと思っていたがそんなことはなかったようだ。
とても楽しみだ

相澤先生万能すぎて原作弱体化受けまくってて草生える

相澤ｓｉｄｅ

俺にとって林森は一番付き合いの長い子供であり、知り合いだ。

という少ない言葉で表されるような付き合いではなかった。

俺の『個性』は抹消で発動系、変形系の個性の発動を発動できなくさせることができる。

なので、「個性が暴走した子供を止める」なんていう仕事は少なく無かった。

だが多くの仕事を受けてきた中でも「これ」は異例の出来事だった。

相手の個性が強力なので危険性があるため、発動させないために俺の力が必要。

これはまだわかる。

実際に他の事件ではこの理由で呼び出されたこともあった。

だが今回は場所が場所だった。

名前は『タルタロス』

本土から約５ｋｍ離れた沖に建造された収容施設だ。

便宜上拘置所とされているが、実態は国民の安全を著しく脅かす、または脅かした人物を厳重に禁固し監視下に置くものであり、刑の確定・未確定を問わず様々な『個性』の持ち主が収容されている。

居房は６つに区分されており、〝個性〟の危険性や事件の重大性によって振り分けられている。危険性の高い人物程、地下深くに収監される。

一度入れば生きて出ることは叶わないといわれており、『個性』社会の闇とも呼ばれている場所だ。

依頼の対象者はたった５歳程の少年。

それに個性のコントロールもできているときた。

正直言って上の連中は馬鹿なのかと思った。

子供を地下深くへと封じ込めて監禁する。

まともな神経をした人が出来ることだとは思えない。
この仕事の過程で彼の生活を見せてもらった。
そこでの彼の生活は下手をすればただの刑務所に入っている罪人よりも待遇が悪い。
小さな部屋の中にヒーローに関する本や人形だけが置いてあり、不審な行動をすれば銃口を向けられ、もらえる食事はパンと塩味のスープだけ。
これが大人のやることなのかと思った。
実際に訴えたが俺の介入出来ることはないと言われてしまった。
ならばせめて俺だけでも彼との繋がりを持とうと、そう心に決めた。

彼の『個性』は「植物生成」。
簡単に言うと、掌から木を生み出したり、花や草を生やす種を生み出すことができる個性だ。
それだけを聞くとあまり強そうではない。
が、その個性の力が途轍もなかったのだ。
育つ植物は一瞬にしてビル全体を覆い尽くす程の範囲と速度。
それに加えて例え木を切っても再生するというタチの悪さ。
『個性伸ばし』をせずにこれなのだ。
間違いなく規格外。
俺が呼ばれることも頷ける強さだ。
ただ、この個性だけならこんな監禁状態には置かれず、そもそも一市民である彼は平和に家族と暮らしていたのかなとも思う。
もし仮にその力が上の連中に知られていたとしても警戒されるだけで済んだ筈だ。
ただ彼は「普通」じゃ無かった。
６４人。
確認されているだけでもこの人数が彼１人に殺害されている。

特段からはいじめなどを受けていたわけでもなく、寧ろ人気者の方だったらしい。
事件は突然起こったらしく、同じ教室にいた生徒や先生を殺害、その悲鳴を聞きつけてきた大人や、通報されてきたヒーローを軒並み刺し殺していた。
結局はたまたま近くをパトロールしていたエンデヴァーが駆けつけ、多少は彼も粘っていたものの、相性最悪な炎の攻撃を受けた後、そのまま体温が上がり本人が気絶。
近くにエンデヴァーがいなければ被害はさらに広がっていたと予測されるらしい。
エンデヴァーが言うには
「…文字通り子供が玩具を見せびらかすようだった。気持ちが悪い、本当に子供か？アレは」
とのことらしい。
エンデヴァーはオールマイトとは比較されるが間違いなく最強格のヒーローだ。
事件解決数こそオールマイトを超えているし、実力も唯一彼に迫っているヒーローだ。
そんな彼にここまで言わせる子供はなんなのだ。
それを危惧した政府は事実を改変し、表向きにはテロリストによる大量殺人事件とした。
そのまま彼は裁判をスルーしてタルタロスの最下層へと厳重に送られのだった。
そうして事件は幕を下ろしたのだ。

彼と初めて会ってから5年が経った。
未だに数ヶ月に一度、タルタロスへ赴き林森と喋る日々を繰り返している。
やはりあの少年が大量殺人鬼には到底思えない。

実に非合理的な思考だ。
何故認められないのだろうか。
間違いなく彼が人殺しだという事実はあるというのに。
それは彼に情が湧いてしまったからだろう。
それに罪悪感もある。

去年からつい最近まで彼は罪が特に思いヴィランにのみ課せられる人道を無視した刑罰を受けていた。
常に周りの状況がわからぬよう五感のほぼ全てを封じ、全く身動きが取れなくする。
人は三日間暗闇に放置されていると発狂するというがそれを彼は一年間以上その苦痛に耐えた。
そうなってしまったのも俺が彼が自由に過ごしたいと思っていたことを上に話してしまったからだ。
そのことを恐れた政府は無理やり彼を拘束。
そして前述に至った。

彼が解放されたと聞いた時、真っ先に授業も中断して会いに行った。
そこで例え許してくれないとしても、こんなことになった原因を伝えて謝罪しようと思った。
でも彼は今までの記憶の通りに笑って許してくれたのだ。

何故責めてくれないんだ、何故当たり前のように俺に笑顔を向けるんだ。
何故、何故、何故と疑問が、心の弱さが滲み出てくる。
そもそも彼の心が強い弱いの次元じゃない。悪人だろうと善人だろうと辛い時は辛い。
今まで出会って来たヴィランにも精神的に追い詰められている人や俺に悪意を向ける人は何人もいた。

だが彼からは何もなかった。
彼は此方に悪意を向けることも、辛かったと溢すことも。
なにも
許してくれた理由を問うことはできなかった。
取り敢えず、その日は出会って少し話しただけで終わった。
何を喋っていたか、どうやって帰路についたのかも余り覚えていない。

数日後、改めて彼に会いに行った。
彼は本を読んでいて、よく見ると以前会った時よりも大分痩せていた。
肋は浮き上がり、頬は痩け子供らしい体つきは失われていた。
沢山話したし、沢山謝った。それを
「いいよ」
の一言で許された。
少し怖かった。
多分だが彼は自分のことが大事だと思っていない。
だから興味がないのではないか、そう考えた。
今は彼が懐いてくれているがその力や精神がまた民間人を傷つける結果になるのではないか。
自分が教えて来たことも大したものだと思っていないのではないか。
そう考えていたら自分が「先生」をやっていることに気がついて、今となっては彼は俺にとっての生徒なのだと気づくことができた。

体育祭がオリンピックの代わりとかｗ

きっと最初は意味なんてなかった。
友達が嫌いだったわけでも、殺したいほど憎くもなかった。
でも彼が血を流して倒れているのを見た僕は綺麗だと思った。
彼は頑張っていたんだ。
「辛そうで」「苦しそうで」「痛そうで」
でも彼は必死に生きようと足掻いていたんだ。
それはどんな芸術よりも美しく、儚いものだろうと子供心ながらに考えたんだ。
だからいっぱい殺そう。そう思ったんだ。
わがままだと思うけど、それはとても魅力的だった。
僕はなんでもできたから、人の命が見えたから、何もかもがモノクロの世界みたいにつまらなく見えていたんだ。
そんな中で初めて生まれたたった一つだけの彩だったんだ。
なら、我儘言ってもいいだろう？

どうやら今日が雄英体育祭とやらの開催日らしい。
先生は仕事が忙しいらしく、暫くここにはきていないが、予定日が来てしまったこともあり、彼からの説明を受けないまま鑑賞することとなった。
面白かった。
久しく見ていない娯楽なのだ、一層そう感じるのかもしれないが僕の人生におけるＴＯＰ５には確実に入るほどの衝撃と楽しさだった。
今回は２年生の競技を見た。

先生が受け持つクラスの子は誰1人いないらしく、A組全員が除籍されているらしい。
まぁそんなことはいいんだ。
羨ましい。
そう思った。
僕はこんなところで閉じ込められているというのに。
彼らは人生を謳歌している。
「羨ましい」「妬ましい」
僕もそこへ行きたいんだ。
楽しみたい！遊びたい！自由になりたい！

でもそのためには全部邪魔なんだ。
ここも先生も大人も今はいらない。
そんな思考が頭に思い浮かんだ時、久しぶりに感じる不快感と高揚感が溢れてきた。
嫌いで、憎くて、気持ち悪くて（大好きで、愛しくて、気持ちが良い）

多分そんな感情。
なら、全部捨てていこう！
邪魔なものを全部捨てて自由になろう！

そう思い、立ち上がるとモニターからよく知るいつもの大人の声が聞こえてきたんだ。
彼が騒ぐものだからうるさくてモニターもカメラも殴って壊してしまった。

バン!!
と壁を殴っては見たものの、ヒビすら入らない。
そこで僕は個性を使い、大量の木を生み出した。
その木々は壁全体へ張り巡らされ、その木が成長する力によって壁

を破壊した。
その次の瞬間、ヒーローと思われる男が氷を発射してきた。
僕はそれを躱し、男の体内へ手を突き刺した。
すると男が倒れ暫く痙攣していると、体から木が生えてきてその代わりに男の体はドンドン萎んでいってそうしていつの間にか体は一切残らず男は木になっていた。
この木は根の部分や枝の部分が異常に発達しており、さらに通路を塞ぐように広がっているため無理にこの道を通ろうとすれば枝によって肌を傷つけるという一石二鳥の技だ。

ただ今は上へ上へと進んでいく。
壁や天井を突っ切り、襲ってくるヒーローや囚人服を着た奴を先程と同じように処置して進んでいった。
そうして暫く進むと、建物から脱出していた。
そこで周りを見てみると一面が海に囲まれているというものだった。
目を凝らして周りを見てみると、遠くに島が見え、そこにまず向かおうと思った。
向かうとはいえ島まではだいぶ離れており、泳いでいくのなら時間がかなりかかりそうだ。
そこで僕は体全体に木を巻き付けて鎧のようにした。
さらに足元についている木は限界まで捻られている。
その捻った状態から元に戻る弾性エネルギーを利用して僕は地面から弾かれるように跳んだ。
その速度は音速を超え、通った海面上は空気の衝撃で大きな波を起こし、キィィィインという戦闘機が出すような音を出していた。
そうして少しの時間が経つと島へ到着した。
そこで僕は地図を入手して、本州へまた同じ方法で向かうことにした。
島には小さな町と軍の基地のようなものだけがあった。
町へ行って地図を入手しようと思っていたが、人のいる気配がな

く、シャッター街と呼ばれる商店街だけが並んでいた。
町の地図が貼ってあったのでそれに従い、本屋へ向かって飾ってあった地図を入手した。
その地図を見て、とりあえず北へ向かっていけば本州に向かえることがわかり、木箱を生み出してその中に地図を入れた。

そうして地図を手に入れた僕は島の最北端へ向かおうと歩いていると、
『懐かしい熱』を感じた。
後ろを振り向くとこちらへ拳を叩きつけようとしている炎を纏った男がおり、その男の名前がエンデヴァーであるということを僕は覚えていた。
回避はできない、受け流すことも流石に無理、となると木の盾を展開して拳から身を守った。
「久しぶりだな・・・・ ガキ」
「うん、本当に久しぶりだねエンデヴァー。僕は今、とっても心躍る気分だよ」
「そうか、では大人しく捕まっておけ‼?」
そういった彼は炎を飛ばして攻撃してきたのだった。
それを僕は体に展開した鎧で受け流し、彼に殴りかかった。
「熱いなぁエンデヴァー、でも生きてるって感じだ!」
「クッ!異常者め、燃やし尽くしてやる!赫灼熱拳‼?」
そう彼が言った後、今までとは比較にならないほどの熱が僕を襲った。
これは今の鎧では防げないと直感でわかる。
そこで木を完全なる球体へと変形させて僕の体を囲わせた。
だがこの状態から外を眺めることはできない。
そこで僕は目を瞑り、自然のエネルギーを体全体で感じ取った。
この感じ取る力は椅子に固定されている時に覚えた技で、僕の個性である植物を生やすという行為で作り出す時にエネルギーをどれほ

ど込められるのかというものを調節する際に思い浮かんだ応用であり、植物に動物、果ては無機物に宿る生命エネルギーを感知する技術だ。
生命エネルギーを探知して、エンデヴァーが球へと殴りかかっていることを確認した僕は殴り掛かられている方向とは逆へ飛び出し、そして

逃げ出した。

「は？」
彼がそんな気の抜けたような声をしたのが聞こえた。
「エンデヴァー、僕が戦うわけないだろう？今は逃走中だし、あなたは強いんだ。時間がかかる、それに僕らが戦う理由なんてものはないじゃないか」
「なんだと？」
何故ってそれは
「だって別に監獄に入れられたことも、殴られたことも、燃やされたことも、怒ってなんていないしもっと言えば憎んでなんていないからさ僕があなたと戦う理由なんてものは存在しないんだ」
「・・・・　貴様がそう思っていたとしても此方には関係ないな。今ここで捕まえるだけだからな！」
「そう。じゃあ僕は逃げるね」
「おい待て！貴様！プロミネンスバーン!!」
そうして僕は十字に放出される炎を背景に、体に鎧を展開して島から飛び出し、本土へと向かった。

少年ジャンプ（した後）

島から飛び出し、数分もかからずに陸地へとたどり着いた。
だがすぐにエンデヴァーも追ってくるだろう。
それこそ地の果てまで。

そう思っていたけど……
流石に一日中追ってくるのは常識外だろう！
最速のヒーローホークスと共に文字通り一日中追いかけてくるのだ。
しかも翼の方は僕よりも早いし小回りも効く。
跳んで逃げることはできないし逃げたとしてもどこからともなく追ってくる。

どうやって僕の位置を把握しているんだ？
ヒーローの勘というやつだろうか。
いや、「個性」か？
ラグドールというヒーローの「個性」である「サーチ」は目で見た人物の相手の居場所や
弱点を把握できるというものらしい。
だが監獄時代に女性、ましてやヒーローになんて会ったことはなかった。
なら発信機か？
どこに。

体の中か!!
そう考え着いた僕は体の中の生命エネルギーを探知する。
するとすぐに小さな発信機らしきものを発見した。
だがこれはなかなか取り出せないだろう。

その発信機はリング型で心臓の血管に直接取り付けられていたのだ。
取り出そうにも体を開いてペンチか何かで血管を傷つけないように取り出さなければいけない。
そういう考えで彼らも取り付けたのだろう。
いつの間につけられたんだ？
いや、捕まえられた時すぐに取り付けたわけか。
こんな時が来ると予想して。

全く、つくづく僕は環境には恵まれていないようだ。
そうやって言って僕は胸へと手を突き出して心臓を抜き取った。
胸から血が噴き出して、辺りを赤く染めている。

痛い、痛い、痛い、痛い
熱いし苦しい。

でもこれは必要な過程だ。
自由じゃなかった僕は生きていなかった。
知らない人の記憶を手に入れても、体育祭を見ても、自由じゃなかったら生きてはいないのだ。
だから僕が生きる為には邪魔なものを壊す必要がある。
これはその覚悟の為の通過儀礼だ。
僕が自由に生きる為には邪魔なものが多くあるかもしれない。
こんな痛みも沢山あるかもしれない。
たがそれを乗り越えてこその人間だろう？
だからここで限界を越える覚悟を決めるのだ。

とはいえこのままだと普通に出血多量で死ぬ。
それは困る。
個性を使って体を変質させる。
細胞の一つ一つに僕が作り出せる植物の中で一番生命力が強いものの細胞を組み合わせる。
それをやった後、人間じゃなくなるかもしれない。
だがもう覚悟を終えた。
迷いはない。

体内へと個性を使用し、細胞レベルまで小さな木を造る。
身体中へと張り巡らせて体を掌握するんだ。
そうやって頭のてっぺんから足の先までを完全に掌握した。
そうした後にさらに個性を使って自分の細胞へと植物の情報を組み込んでいく。

体が組み変わっていくような感覚。
人じゃないナニカへと変わっていく感覚。
不快で仕方がなかった。

数時間？数分？もしかしたらもっと短かったかもしれないが極限の集中状態で、時間の感覚が全くなかった。

そうして全ての細胞へと情報を組み込み終えた時、僕は全能感に満ち溢れていた。
今まで意識しなければ見えなかった生命エネルギーといえるものがはっきりと、今までよりも鮮明に見えるようになり更に力強い生命を生み出すことが可能だとわかった。
さらに体の形を好きに変えることも可能なようだ。
腕を鞭のようにしならせたり、剣のように鋭くすることもできた。
肉体が人のものではないのだろう。
失った心臓や血液も足す必要すらない。
顔を確認することはできないが、体を見る限り見た目に大きな差はないように感じる。
だが胸の辺りには大きな穴が開いていた。
それを木で埋めて肌の色と同化させる。
これで全部元通り、なにも問題はない。

さて、逃げよう。
もうこれで追われる心配はなくなったはずだ。
だが念には念を入れて逃走した場所がバレないように痕跡を沢山残しておこう。
体の構成物質とほぼ同じ性質で、同じ形の人形を沢山作り出す。
これを使って逃げた痕を残しておいたら時間稼ぎにはなるだろう。
この技をそうだな、「木分身」と名付けよう。
きっとこれからもこの技を重宝するだろう。
何せ自分とほぼ同じ身体能力の人形を大量に生み出せるのだ。
その強さはかなりのものだろう。
？…てっきりこの人形も人格を持って喋ると思っていたのだが喋らないし全く動こうとしない。
自分の意思がないのか？
僕が操作したり、命令をすればその通りに動く。
だがそれだけだ。
多分何か、決定的に足りないものがあるのかもしれない。

でも今の僕にはそれはわからない。
まぁいい。
時間は沢山あるのだ。
じっくり調べていけばいい。
木分身を散開させた後、僕は木で翼を作り、空を飛んだ。
わざわざ痕跡を残したのだ。
それとは全く違うルートを辿らないと意味がないだろう。
さて、どこに向かおうかなぁ。
そんなことを考えて、とりあえず街に向かって飛んでいった。

そうして僕、林森林太は無事ヒーローから逃走することに成功した。

体育祭　僕は行けない　悲しいね

林森林太、否。
ヴィラン名「センジュ」はタルタロス脱走からおよそ1週間ほどをヒーローに追われ続け、そして海沿いの街で大量の血痕と共にその姿を消した。
タルタロス脱走という大事件は世間に晒せるものではなく、市民に混乱を及ぼすだけでなくヴィラン活性化にも手助けするだろうことが予測された。
故にその情報は公安の人物やトップヒーロー、具体的にいえばヒーロービルボードチャート10位以上の人物にのみ伝えられた。
ただ、情報を完璧に隠蔽することは不可能であった。
それはただの都市伝説として扱われたり、一部のヒーロー達の中では事実だと認知されていた。
それは裏社会の、奥の奥に居るもの。
つまりAFOに知られていたのだった。

「はははははは!!」
「ど、どうしたんじゃ先生、そんなに笑って」
「いや、すまないねドクター」
「日頃からこの国の警察や公安は無能だと思っていたけど、まさか齢10ほどの少年にここまでとは……」
「つまり何があったんじゃ？先生」
「あぁ、タルタロスから脱獄者が出たんだよ」
「本当かいな、それ」
ドクターは大きく目を見開いた。
タルタロスは結構優秀な場所で僕といえど捕まってしまったなら誰かの助けがないと出るのは少し厳しいかもしれない。
それほどの場所だ。
そう疑うのも仕方無いように思えるほどの場所、それがタルタロス

だった。
　そう考え、彼を見ると此方を疑いの目線で見ていた。
「本当だよ、ドクター公安にいる僕の配下から聞いた情報だ」
「彼はなかなか優秀でね、普段からいい情報を流してくれる」
「ほぉ、まさかあのセキュリティを突破するものがいるとは」
「で、その脱獄者というのが？」
「そう、大体１０歳ほどの少年らしいんだ」
「ほら、ちょうど５年ほど前大量殺人事件があっただろう？」
「はて……さっぱりわからんのう」
「ふふ、まぁ覚えていないのも仕方がない」
「ほとんど隠されていた事件だったからね」
　そう、メディアには殺人事件があった程度のものしか載っていなかったのだ。
「いや何、その事件の詳細を聞いたときには衝撃を受けてね」
「結構記憶に残っていたのさ」
「ふむ、そうだなぁ」
「ドクター、モズは知っているかい？」
「あの、餌を枝に刺して保存する鳥のことかいな？」
「そうその鳥のことだ」
「なんじゃ？いきなりそんなこと聞いて」
「その事件ではね、被害者が全員餌をまるで見せびらかすように木の枝に刺してあったのさ」
「傷口を観察すると生きたまま刺されたものが大半だったみたいでね、全員が苦悶の表情を浮かべて死んでいたらしいんだ」
「それはなんともまぁ、珍しい事件じゃのう」
「しかもね、それをやったのが個性が発現してから１年も経たない５歳ほどの少年だったらしいんだよ」
　それを聞いたとき、僕は弔に並ぶ才能だと思った。
　圧倒的悪の素質、わざわざあたかも芸術品のように挿してあったということは間違いなく故意で行っていたのだろう。

是非とも欲しいと思った。
その個性だけじゃない。
その子自身をだ。
きっと話すことができれば弔の、良い味方となれたろうに。
すでにその話を聞いた後は収容されていたらしい。
そんな子供が最近脱獄してきたというのだ。
興味があるに決まっている。
「で、結局その子を連れてからのかのう？」
と、ドクターが聞いた。
「いや、今はまだ早い」
「それに彼もきっといつか自分からこちら側に来てくれるさ」
「それは、何か根拠があるのかの？」
「いいや？全くないさ、ただの勘だよ」
「ククッ、ここに来て勘とはやっぱり先生は面白いのう」
ははははは
と、絶対的な悪である２人が暗闇で嗤っていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー1年後

ふぅ。

と溜息をついた。

今年も体育祭面白かったなぁ。

去年よりもハラハラドキドキ、興奮するって感じだった。

「君もそう思わないかい？」

そうやって筋骨隆々な男に話しかけた。

頭に棘が生えた灰色の肌をしており、異形型の個性であることがわかる。

だがその男はもう死に体で、口を動かすのが精一杯のようであった。

「クソ…ガキの癖になんでこんなに強いんだよ…」

「聞いてないぞ、ただのガキを殺すだけの簡単な仕事だったはずなのに……」

どうやら話は聞いてくれないらしい。

そう思い僕は木を操作して男の体を持ち上げた。

「ヒッ…な、何をするんだ!?」

「ん？いや、君に用はもうないからどうせなら綺麗に死んで欲しいと思ってさ」

「い、嫌だ！死にたくない！舎弟にもなる！金も渡す！言われたことはなんでもするからどうか命だけは！」

「ん～だめ♡」

そう言って木を操作して男の腹へと突き刺し、中身をかき混ぜた。

「あぁぁぁぁぁ!!いだぃ！いだいいだい！殺じで！殺じでぐれぇぇ!!」

そう言って、男は騒いでいた。

「全く、注文が多い人だなぁ」
「あっっっ」
プチュン
という音を出して頭が潰れ、呆気なく男は死んだ。
ヴィラン名「センジュ」11歳の夏の日常であった。

焼き肉って美味いよなぁ。み●を

肉を咀嚼する音が聞こえる。
モニュモニュと、子供がその小さい口を動かして食べている。
米と、味噌汁と、肉。
普通の定食のようなメニューであった。
すると、子供の顔がどんどん悪くなっていく。
暫く経つと彼はえずいて、吐き気を催しているようだった。
トイレへと彼は向かい、そこで嘔吐してしまった。
何度も何度も、肉を食らい、吐き、食べてはえずき、苦しそうで、見ているだけでも不快だった。
でも彼の顔は不快そうにしながらも、何処か理解したような顔で、それが俺は気に入らなかった。
ただの子供が、いや、ただの子供ではないかもしれないがそんな顔をすることがこんな俺でも少し苛立ちを覚えた。

――

やっぱりだめだったか。

あの日からずっとこうだ。

何かを口にすると吐き気がする。

気持ちが悪い。

それは肉でも魚でも野菜でも変わらない。

消化器官の構造は同じなはずなのに。

胃酸だってあるし中の構造は普通の人間と何ら変わらない。

でもきっと本能が拒否しているんだ。

食事という行為自体を。

エネルギーだけの問題ならば問題はないのだ。

日に当たるだけでもそれは手に入るし生み出した植物から直接生命力を奪うことで自給自足ができる。

だが食べるというのは人にとってとても大事なものなのだ。

だから例え僕がもう人間ではなくても「人」として生きるためには食べることは必要だったのだ。

でも無理だった。

はぁ、とついため息が漏れてしまう。

「すまないね、義斓」

「またここらを汚してしまった」

「あぁ、いやいい」

「そんなことはどうだっていいんだよ」

「それより、大丈夫なのか？本当に」

「何がだい？」

「あぁもう！こっちは心配してんだよお前をよ！」

あいも変わらず察しの悪い奴だなと、彼は言った。

「ふふ、心配してくれてありがとう」

「でも大丈夫だよ」

「もう慣れたから」

そう彼にいうと呆れたように息を吐き、話をしてきた。

「……ヴィラン連合って分かるか？」

「ああもちろん」
「最近は彼らの話でメディアが賑わってる」
「でもヒーロー殺しには人気度では劣るって感じだけどね」
「それで？その人達がどうしたんだい」
「俺はあそこにお前を推薦しようと思った」
「この間の襲撃事件で戦力が減ったらしくてな」
「メンバーを探しているらしい」
「手数料もかなりもらえるし、何より……」
「何より？」
「…お前に合うと思ったからだよ！」
少し、理解するのに時間がかかった。
久しぶりに受けたただの好意だったから。
それは彼が恥ずかしがっているのを見ても分かる。
「…君は、優しいね」
「あぁクソ！だから言いたくなかったんだよ！」
「ふふふ、そんなに言うなら入ってもいいかな」
「まぁ、合わなかったら抜ければいい」
「僕はもう誰にも支配されないんだから」
僕がそう言った時、少し体が軽くなった気がした。
さっきの食事で疲れて少し暗くなっていたのかもしれない。
「…そういえば今回の報酬を渡してなかったな」
ほらよっと言って紙袋を彼は投げ渡してきた
中身を見てみると札束が入っており、１００万以上はあることがわかる。
「いつも仕事をくれてありがとうね」
「何、こっちとしても厄介な奴を消してもらっているんだ、感謝しかないさ」
この金で何か服でも買いに行こうかなと僕は思った。

ヒーロー殺しが逮捕されたらしい。
エンデヴァーによって。
だがその余波は大きく、現代社会に大きく爪痕を残していた。
だが英雄回帰という考え方はステイン自身が強い人だったからこそ言えたことなのだろうとそう思った。
ヴィランになる人は大抵弱者だ。
社会的地位が低い人、個性で虐められていた人、心が弱い人。
そんな人間が悪になる、いやなってしまうのだ。
強い人間は正義であろうとする。
特にオールマイトなんかはそうだ。
この世界における一つの最強。
心技体共に最高峰に達している。
だが人は皆そんなに強くはないのだ。
欲にも負けるし、体もそんなに強くない。
せいぜい体に木が刺さる程度で、出血多量で死に至る。
だが彼はそんなヒーローを許さない。
怠惰なヒーロー飽和社会を嫌う。
そんな考え方が英雄回帰。
そう僕は考えた。

さて、そんなことを考えていた僕だがこれは現実逃避である。
僕は今、この間もらった金を使って買い物をしていた。

暫く散策していると子供が一人でいることを不審に思ったのか、目の前のどこかで見た事があるような女性から話しかけられ、追求されていたからである。
「君1人だけど迷子なん？」
「職員さんよぼか？」
「そうだね……考え方の迷子って感じかな？」
「なんやこの子、癖強っ」
そう言って彼女は笑っていた。
「で、君はなんで1人でベンチに座ったったん？」
「あぁなんていうのかな、ただ買い物に来てただけなんだけど強いて言うならば……」
「言うならば？」
「家出少年かな？」
「はい確保ー！」
「ちょっ、ちょっと待つんだ君」
「落ち着いてくれよ、困っちゃうじゃないか」
「なんで君そんな大人ぶった喋り方やねん！もっと子供らしくした方がいいよ！」
「大人ぶっ…はぁ、まぁいいからとりあえず離してくれ」
溜め息ついて僕はそう言った。
彼女は少し不服そうな顔をしたがすぐに離してくれた。
「まずこの喋り方は普段からこうで別に大人ぶっているわけじゃないから…」
「はいはい、わかったわかった」
「そういや聞いてなかったけどまず名前なんて言うん？」
「私は麗日お茶子！雄英のヒーロー科だよ！」
「君は？」
「僕は…センジュ」
「うん、センジュって呼んで」
「ふーんセンジュくんかぁ」
「言い方からして本名じゃなさそうだけどまぁよし！」

「って言うか聞きたいことがあったんだけど少しいいかな」
「なになに？答えられる範疇なら答えるよ！」
　僕が雄英生ときいた時これが一番聞きたかったことだ
「相澤先生って知ってるかい？」
「知っているも何も担任の先生だよ」
「そっか…実は僕も彼の生徒なんだよ」
「え!!そうなん!?」
「どう言う関係性やねん!?」
「どう言うってそうだな、家庭教師みたいなものかな」
「彼からは色んなものをもらったし大事なこともたくさん教えてくれた」
「まさしく恩師だよ」
「そっか…」
「もしよければ雄英での話も聞いていいかな？」
「もちろん！先生はこの間の襲撃事件でも私たちを守ってくれたんだよ！」
「しかもヴィランをどんどん倒していっちゃうし、かっこよかったなぁ…」
「でも普段はちょっと怖いけどね」
「他にもね、……」
　と、その後も２０分ほど会話を続けながら歩いていた。
　すると彼女は何かを見つけたようで
「デクくん？……」
　と呟いていた。見ていた方向を見ると仲良さげに肩を組んでいる男二人がいた。
「ごめんな、ちょっと行ってくるわ」
　と彼女は言った
　それに僕は
「…いいのかい？僕を放っておいて」
「あんまり良くないかもだけど、ちゃんと自分で帰ってきちんと親と仲直りしなよ！」

「……あぁ、そうだね、久しぶりに帰るのもいいかもしれないなぁ」
そう言った時にはもう「ばいばい」と彼女は言って離れていった。

「…帰ろう」
今の「センジュ」の家へ。
林森林太はもう死んだのだ。
周りの人を巻き添えにして。

結局ＡＦＯの本名って死柄木なんなん????

神野区にある薄暗い、どこにでもあるようなバーで２人の男が話していた。
１人は顔に手を貼り付けた白髪の男。
もう１人はシルエットだけが見える黒くぼやけた霧のような男。
「気になりますか、死柄木弔」
「その少年、緑谷出久が」
そう話しているとカランコロンとドアベルがなり、誰かが入ってきた。
「死柄木さん」
「こっちじゃあ連日あんたらの話で持ちきりだぜ。何かデケェことが始まるんじゃないかってよ」

「で?そいつらは」
死柄木の目線の先には隈だらけの女子高生と火傷痕が痛々しい男が立っていた
「あんたがそうか、写真で見てたが生で見ると気色悪いな」
「あはっ、手の人!ステ様の仲間だよね!ね!」
「私も入れてよ!ヴィラン連合!」
「黒霧、こいつら飛ばせ」
「俺の大嫌いなもんがセットで来やがった」
「ガキと、礼儀知らず」
そう言って死柄木はそれぞれ女の方と男の方を指差した。
「まぁまぁ、せっかくご足労いただいたのですから話だけでも伺いましょう死柄木弔」

「それに、あの大物ブローカーの紹介、戦力的にも間違いないはずです」
「なんでもいいが手数料は頼むよ黒霧さん」
「とりあえず紹介だけでも聞いときなよ」
「まずこちらの可愛い女子高生」
「名前も顔もしっかりメディアが守ってくれちゃってるが連続失血死事件の容疑者として追われている」
「トガです！トガヒミコ！」
「生きにくいです、生きやすい世の中になってほしいものです」
「ステ様になりたいです、ステ様を殺したい！」
「だからヴィラン連合に入れてよ弔くん！」
「意味がわからん、破綻者か」
「会話は一応成り立つ、きっと役に立つよ」
「次、こっちの彼」
「目立った罪は犯してないが、ヒーロー殺しの思想にえらく固執してる」
「不安だな」
「この組織、本当に大義はあるのか？」
「まさかこのイカレ女を入れるんじゃねえよな？」
「えっ？」
　と、トガが声を漏らした。
「おいおいその破綻ＪＫすらできることがお前はできてない」
「まず名乗れ、大人だろ」
「今は荼毘で通してる」
「通すな本名だ」
「出す時になったら出すさ
　とにかくーーー
　ヒーロー殺しの意志は俺が全うする」
　そういう男の目には信念があるかのようだった。
「…聞いてないことは言わないでいいんだ」

「全く…どいつもこいつもステインステインと…」
「あっ！いけない死柄木！」
「よくないな」
「気分が良くない」
「だめだお前ら」
　そう言って死柄木は手を突き出した。
　それに反応するようにトガはナイフを突き、荼毘は掌に火種を入れた。
　が、その全ては黒い霧に飲み込まれ、見当もつかない方向へと向いていた。
▪
▪
「落ち着いてください死柄木弔」
「あなたが望むままを行うのなら組織の拡大は必須」
「奇しくも注目されている今がその拡大のチャンス」
「排斥ではなく受容を」
「利用しなければ、全て…」
「彼の残した思想も全て…」
「…うるさい」
「どこ行く？」
　義爛が聞く。
「うるさい」
　死柄木はそう言って返した。

「取引先にとやかく言いたかないが…」
「若いね、若すぎるよ」

「殺されるかと思った」トガが言う。
「気色悪い」茶毘が呟いた。

「返答は後日でもよろしいでしょうか？
　彼も自分がどうすべきかわかっているはずだ」
「わかっているからこそ、何も言わずに出ていったのです」
「オールマイト、ヒーロー殺し…
　もう2度も鼻を折られた」
「必ず導き出すでしょう」
「あなた方も、自分自身も、納得するお返事を」
「そういや黒霧さん」
「今日本当は来る予定だった奴がもう1人いたんだが…
　今買い物に行っててな」
「遅刻してる」
「……先程その発言をしなくて本当に良かったです」
　心底疲れたように、黒霧が言った。

―――――――――――――――――――――

あの日からまた時間が過ぎた。
日に日に計画のための準備は続いている。

「弔君から荷物届いたよ！」
「全員分あるから現地まで運んでくれだって」
「疼く、疼くぞ！早く行こうぜ！」
筋骨隆々の男が言う。

「まだ尚早、さらに派手なことはしなくていいって言ってなかった？」
まだ学生ほどの印象を受ける少年が言う。
「ああ」
「会った途端に襲いかかってきたくせに」
「急にボス面始めやがってな」
「今回はあくまで狼煙だ」
「虚に塗れた英雄たちが地に落ちる」
「その輝かしい未来のためにな」
茶毘がそう言ってニヤリとその口を歪めていた。
「ふふっ」
「茶毘、今はそんなことどうでもいいんだよ」
「久しぶりに先生に会えるんだから」
「君の目的は僕にとっては二の次」
「マスキュラーだってただ暴れたいだけだろう？」
「あぁ！そうだぜ！なんなら今お前とやってもいい！」
「ふふふ、それはだめだよ」
「計画に間に合わなくなっちゃうからね」
君が怪我して。

僕は待つのがそんなに嫌いじゃないんだけどそれでも

「楽しみだなぁ……」

本当に

暗闇に潜んでいるヴィラン達の中でも一際小さな少年は、そう言って恍惚とした表情を浮かべていた。

林間学校…行ったことないンゴ…

「あれは…」
「黒煙…」
「何か燃えているのか？」
「まさか山火事？」
「なっ何!?」
「ピクシーボブ！」
「飼い猫ちゃんは邪魔ね」
「な…何で…万全を期したはずじゃ…。
　何でヴィランがいるんだよ…！」
「ピクシーボブ！」
「やばい…」
「ご機嫌よろしゅう雄英高校。我らヴィラン連合開闘行動隊！」
「ヴィラン連合？何でここに…？」
「この子の頭…潰しちゃおうかしらどうかしら？ねぇ、どう思う？」
「させぬわこの…」
「やめろマグネ、やるなら後で僕がやる。僕によこせ。いや、やっぱり今やろうかな。やろうよ!!」
「ちょ…あなたテンション高くない？」
「高くもなるさ！ずっと待ってた日なんだよ。実に1年ぶりの再会！あぁ、彼は一体どんな顔をしてくれるかなぁ…？」
「待て待て、早まるなマグ姐に、センジュ。虎もだ、落ち着け。生殺与奪は全てステインのおっしゃる意志に沿うか否か」
「ステイン…！」
「奴の思想に当てられた連中か！」
　そう言われるとスピナーは手を広げて演じるように言った。
「ああそう俺は…そうお前、君だよメガネ君。保須市にてステインの終焉を招いた人物。申し遅れた…俺はスピナー、彼の夢を紡ぐもの

だ」
そう言って大量の刃物が束ねられてできた大剣を取り出した。
「何でもいいがな貴様ら…その倒れてる女ピクシーボブは最近婚期を気にし始めててなぁ…女の幸せ掴もうって…いい歳して頑張ってたんだよ。そんな女の顔傷物にしてー
男がヘラヘラ語ってるんじゃないよ!!」
我先にとスピナーが切り掛かった。
「ヒーローが人並みの幸せを夢見るかぁ!テメェらのような利己的なヒーローもどきは…粛清対象だ!!」
軽くマンダレイに避けられた。
やっぱりスピナーは弱いな。基本大振りばかりだし個性もそこまで強くはない。
「えっ」
「何照れてんの?うぶね!」

?あぁ、マンダレイか。
彼女の個性はテレパスで、確か対象に念話ができるんだったか。
大方口説かれたとかそこらだろう。
「くっ…何て不潔な手を。尻軽女めが」
「あっぅわぁあ!」
マンダレイがマグネに引き寄せられた。
彼女はかなり強い。
男をS極、女をN極の磁石人間にする能力。
格闘中に発動するだけでも調子が狂わされるしなにより彼女自身がかなり強い。
「おいで飼い猫ちゃん」
「くっ」
このまま引き寄せられれば頭にダメージを与えることができるだろう。
だがそううまくいくはずもなく、虎から妨害があった。
「そう同じ手、させぬわ」

「きゃっ」
　可愛らしい反応をして、マグネが虎に殴られた。
　手伝うか。
「引石健磁！ヴィラン名マグネ！強盗致傷３件、殺人３件、殺人未遂２９件！ヌゥ!!」
　突然マグネの個人情報を語り出した。
　何だこいつ。
「あら、私有名人？」
「何をしにきた犯罪者！」
「待って虎！何かおかしい！ラグドールからまだ返信がない！いつもならすぐ返すのに！」
「貴様らぁ…！何をした！」
「さぁ？何かしらね？」
　ニヤリと笑ってマグネは返した。
　虎が殴る。胴を狙った強烈な連撃だ。だがマグネも腕でそれを受け、避け、逸らす。
「あぁん、もう近い！」
「アイテム拾わせて！」
「ふん！」
　強烈な大振りの蹴り。からの連撃。虎の個性「軟体」を利用した格闘術「キャットコンバット」はかなり強く、マグネも避けるので精一杯なようだった。
「きゃっ」
　…なんか可愛い叫び声出してるが。
「テメェは！本物の！ヒーローなんかじゃねぇ！」
「くっしつこい！」
「そりゃお前だ！」
　そう言ってスピナーはマンダレイは空中へ呼び寄せ、大きいのを当てると思った。
「とっとと粛清されちま「スマッシュ!!」

が、空中から学生が現れたのだ。
彼の蹴りによってスピナーの大剣は破壊され、呆然としていた。
彼は確か優先殺害リストにあった緑谷君だ。
さっきちょうど僕らが来てすぐに出て行った子。
「マンダレイ！浩汰君無事です！」
「君…？」
彼女は少し驚いたような表情だった。
それも無理はない。
彼は全身ボロボロで特に右腕は変色して骨がボロボロに折れていることがわかる。
彼は蹴り壊した勢い余って地面に転がって行った。
「あ、相澤先生からの伝言です、テレパスで伝えて！」
随分必死な様子だ。
一体何があったのか気になる。
「A組B組総員、プロヒーロー　イレイザーヘッドの名に置いて戦闘を許可する！」

へぇ…
相澤先生の教え子か…
ふーん…

「君！すぐ戻りな！そのケガ尋常じゃない！」
「いや…すいません！もう一つ伝えてください。ヴィランの狙い、少なくともその一つかっちゃんが狙われてる！テレパスお願いします！」
「かっちゃ…誰？待ちなさいちょっと！」

さっきの地鳴りのような音からしてマスキュラーに勝ったのか緑谷くんは。
結構好きだったんだけどなマスキュラー。
求めてるものが僕と似てた。
そういう意味ではムンフィも同じか。
僕ら3人は自分に正直に生きてきただけ。
そういう意味では似たもの同士とも言えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

虎ｓｉｄｅ

絶対的な上位者からの重圧は、全員の動きを止めた。
軽いその一言は、その場を凍らせるのには充分だった。
「手伝おうか？」

「ねぇマグネ、聞いてるんだよ。手伝ってあげようか？ってさ」
「う、うん！手伝ってセンジュちゃん！」
奴は最初、猟奇犯的な雰囲気を出していた。
良くも悪くも子供らしい楽しげな表情と発言。
それがどうだ？今では俺を圧倒するほどの気迫を出している。
雰囲気が違いすぎる！なんだ？何が原因だ？
マグネは最初「機嫌がいい」と言っていた。
つまり普段から最初のようではなかったという事。
そして誰かに会いたいという意思を奴は示していた。
その予定が狂ったから急に機嫌が悪くなったのか？
クソ…本当に子供だ。
それもタチの悪い力を持った。
この重圧が個性でない限り業界の超大物レベル！
だがセンジュなどというヴィランは聞いたこともなければ１０歳の子供が起こした事件なんてここ最近は全くないぞ…!?
「センジュ！貴様は一体何が目的だ！何がしたくてお前はいまここにいる！」
「目的？そんなの単純さ。イレイザーヘッドに会うこと。僕の目的はただそれだけ」
イレイザーの知り合いか…まさか緑谷があいつの話題を出したから!?
イレイザーの伝言を伝えたという事実だけでか？
嫉妬深すぎだろ…!!!

「すまんが少年！ここで倒れておけ！」
そう言って腹へ殴りかかった。
が、少年はそれを軽々受け止め話しかけてきた。
「おいおい危ないなぁ、まともに当たったら死んじゃうぜ？」
そう言って奴は自分の腕を切り落とした。
だがその腕からは血が出ず、断面はまるで木目のようだった。
その瞬間腕が爆発したように炸裂し、肉片の一つ一つが棘のようになった。
その棘に刺さるとまずいと判断し、出来るだけ避けたが、手の甲に数本刺さってしまった。
ツッッ！
かなり痛みがある。
この小さな棘が何故こんなにも痛むのだ！

は？
棘が刺さった数秒後、刺さった周りの肉が萎み始めた。
それに対応するように棘は肥大化し、まるで種のようになっていった。
まずい！これはまずいぞ!!
「うおおおおぉ!!」
ザクッと左腕の掌を切り落とした。
残った方からは当然血が出たが、ほぼ感覚もなかった。
痛みも触感もなく、よく見ると手の方は血の一滴も出ておらず種の方はまた破裂する直前、と言った風だった。
「技名名付けて爆針腫。細長い種を飛ばして対象の皮膚に刺し、その場の栄養を吸い取ってまた爆散するループを繰り返す…いい技だとは思わないかい？」
「厄介な…！」
「虎!!」

「大丈夫だ、まだ戦える！」

そう、手は落とさざるを得なかったが心までは折れていない、ならばヒーローはまだまだ戦えるのだよ!!!

虎柄のおばちゃん怖いンゴ…

虎が手を切り落とした。
いい判断だ。
流石に武闘派プロヒーローと言ったところか。
マンダレイではこうも判断は早く無いだろう。
同じ技を何度も撃っても対処されるだけ…か。
そう思った僕は緑谷へと掌を向け爆針腫を放った。
が、避けられてしまった。
さっきも思ったけどやっぱり緑谷君早いな…
全身…特に腕が痛々しい程にボロボロになっているのに動けているのは正気の沙汰じゃない。
アドレナリンとかエンドルフィンがドバドバ出てるんだろう。
僕は知ってるんだ。
漫画で読んだから。
「緑谷ぁ！お前は避難しろ！お前が対処できる相手じゃない！」
「ですけど虎！その腕じゃあもう！」
「何？こっちは命懸けて人助けしてんだ！それに比べれば腕の一本や二本軽いんだよ！いいからお前は保護してもらえ！」
「ッッ…！はい！」
僕が簡単に逃すと思っているのだろうか。
そう思った時にはマグネがもう行動していた。
「手を出すなマグ姉！」
「あんっ！」
かわいい。
「ちょっと何やってんの！優先殺害リストにあった子よ！」
「そりゃ死柄木個人の意志だ」
「スピナー！何しにきたのよあんた！」
「あのガキはステインがお救いした人間。つまり英雄を背負うに足る人物なのだ俺はその意志にしたがぐぅっ！」

あらら、熱弁中に殴られるか。
　空気読めよ、つまらん。
「やっといいの入った」
　マンダレイは弱いな。
　スピナー程度に踊らされる実力。
　判断も遅いし個性が有用なだけ…か。
　ただその個性がかなり厄介だ。
　面倒だし今のうちに殺すか。
　そう思って僕は足踏みをした。
　ここは自然に囲まれている。
　いい土地だ。
　一年前変質した僕の体は個性も進化した。
　自分が出した植物だけじゃなくて周りの木とか花とかの植物を支配できるようになったのだ。
　太く、力強い自然の暴力が地表に現れた。
　虎は強いが武術を用いた対人戦闘が得意なヒーローだ。
　だから質量攻撃が最適。
　操作した根を全て虎に向け放った。
「ぐっ…うぉぉぉ!!!!」
「器用に逸らしているね。でもそれを続ける体力はどれくらい残ってる?さっきの手で血も体力もだいぶ消耗しただろう。僕はいつまでだって続けていられる。さぁ頑張って。ヒーロー」
　避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて逸らして逸らして避けて逸らして避けて逸らして避けて
　でも当たってしまった。
　足に一撃。
　それで体勢も体力も崩れてしまった。

殴り、刺し、抉りとった。
もはや虎には意識はなく、生きているかどうかすらわからないほどだった。
でもやっぱり頑丈だな。
殴った部分はあんまりダメージが入ってない。
もしかして無意識化で個性をずっと発動していたのかな。
軟体で体への衝撃を消してあるがままに受け入れる。
生き残ろうとする生存本能。
まさに野生動物の如き姿だった。
…？爆発音？
音が鳴った方を見てみると影ともいうべきものが森を壊し、突き進んでいっていた。
おいおいおいおい。
何だよあれ。
面白すぎるでしょ！
「すっご…はははははははは!!!!最っっ高だぜ雄英高校!!!!」
あんな火力を出せる個性の持ち主なんてプロでも殆どいない。
あんな個性は特にリストにもなかった筈だ。
でも見たことがあるな。
確か自立行動する影で本体は鳥のような少年。
そして光に弱い、だったか。
体育祭で確かいた筈だ。
光に弱いってことは闇で強くなるのかなとは予想していたとはいえこれほどとは。
ほら、ムーンフィッシュが負けた。
マスキュラーには劣るけど彼も結構強かったんだけど。
うんいいね彼。
確か常闇君だったか。
彼の方がいい。
もともと爆豪を回収する任務だったか。
でも爆豪とかよりも断然こっちの方がいい。

コンプレスならきっとやってくれるだろう。
彼は優秀だしね。

僕は後ろを振り向き虎を掌底で弾き飛ばした。
彼は血を噴き出して後ろへ下がっていった。
「何故…気づいたんだ…」
彼は死んでいなかった。
失った意識もすぐに取り戻し、こちらの隙を窺っていた。
「何故ってそんなのわからないわけないだろ？昔から気配には敏感なんだ」
「そうか…くたばれ…ヴィランめ……」
話の脈絡がついてないぜヒーロー。
それでも心底カッコいいよヒーロー。
本当に。
だから今は殺さないであげる。
今回は先生と会うだけだから喋れないけど、君からどうか僕が元気だってことを伝えてほしい。
きっと喜んでくれる筈だから。

『開闘行動隊、目標回収達成だ！短い間だったがこれにて幕引き！予定通り5分以内に回収地点へ向かえ！』
あぁ、マンダレイはマグネがやってくれたか。
「殺しといて、それ」
「ええ！センジュちゃん、もっちろん！」
ブチュッッと赤く染まったトマトのように頭を潰されて死んだ。
「あら？虎は殺らないのかしら？」
「うん。彼には生きて伝えてもらおう。僕らのことを。それに彼の姿勢を気に入った」
「そう…ならいいわ」
「3人ともご無事でしたか。では所定の位置へと送ります。中に入って」

「黒霧か。気が利くね、ありがとう。じゃあ行こうか」
そう言って黒霧の中へと入り、集合地点へと向かった。

ーー

「あれ？まだこんだけですか？」
「イカレ野郎、血は採れたのか？何人分だ」
野郎じゃないだろ失礼だなこいつ。
「一人でーす！」
「一人？最低三人はって言われてなかったか？」
「仕方ないのです、殺されるかと思った」
「つうかよトガちゃんテンション高くねぇか？　何か落ち込むことでもあったのか？」
「ん～♡お友達ができたのと気になる男の子がいたのです」
「いいねトガちゃん！好きな子ができるのはいいことだよ。恋する乙女は一番強いからね」
本当にそうだ。
「それ俺？　ごめん無理！　俺も好きだよ」
「勘違い乙」
「えぇっ!?」
「うるせぇな黙って…ん？」
茶毘が訝しむように空を睨んだ。
その瞬間、コンプレスが空から降ってきた。
「うおおおおお！」
何やってんだこいつ。
「おいおいおいおい！知ってるぜこのガキども！
誰だ!?」
「かっちゃんと常闇君を返せ！」
緑谷と轟と…あと誰だったか。
知らん人だ。
「ミスター、避けろ」
「ラジャ！」

そう言って彼は自分の身体を収納した。
蒼の炎が彼らへと迫った。
「うあああああっ…！」
「ぐっ…あああ！」
緑谷とマスク少年に当たった。
「緑谷！障子！あっ！」
トゥワイスが轟に襲いかかった。
「死柄木の殺せリストにあった顔だ！その地味ボロ君とお前、なかったけどな！」
でもあいつ本体性能はそんなに強くないんだよなぁ。
攻撃手段が殴る蹴ると定規で切るくらいしかない。
「熱っっ！」
ほら、氷を当てられて下がった。
「トガです！出久くん！アハっっ！」
「ぐうっ」
「さっきも思ってたんですけど…もっと血が出てたほうがもっとカッコいいよ、出久くん！」
「緑谷！」
マスク少年がトガちゃんを殴って遠ざけた。
「くっイカれてるな」
おいおい、乙女の恋路の邪魔をしちゃダメじゃあないか。
「そうですか…邪魔するんですか…あなた少しも好みじゃないけど…刺してあげます」

おっと、コンプレスが起きた。
「イッテテ、飛んで追ってくるとは…発想が飛んでる」
「爆豪は？」
「もちろん……ん？」
コンプレスがポケットを漁ってそう言った。
何してんだこいつ。
無くしたのか？

「緑谷、轟、逃げるぞ。今の行為ではっきりした。個性はわからんが、さっきお前が散々見せびらかした、右ポケットに入ってたこれが！常闇爆豪だな、エンターテイナー！」
「障子くん！」
緑谷が心底嬉しそうに言った。
「ほほう、あの短時間でよく！さすが六本腕。弄り上手め！」
「よし！でかした障子！」
おや、どうやら逃げられそうだが…まぁいいだろう。
「アホが…」
「いや待て」
彼らに攻撃しようとした荼毘をコンプレスが制した。
まぁあっちには脳無もいるしそれに…
「こいつはＵＳＪにいたワープの…!!!」
黒霧もいる。
「合図から５分経ちました。行きますよ、荼毘」
「ごめんね出久君、またね…」
「トウッ！」
「待て、まだ目標が…」
「あぁ、あれはどうやら走り出すほど嬉しかったみたいなんでプレゼントしよう」
雄英生が息を呑んだ。
「癖だよ。マジックの基本でね、物を見せびらかす時ってのは見せたくないものがある時だぜ」
そう言ってコンプレスが口の中から爆豪と常闇が収納された球を取り出した。
汚い…
そして横から別の人が見ているな。
隠れているつもりなのだろうか。
一応念のために根でそいつを縛っておいた。
まぁそれはおいておいてコンプレスは油断しすぎだな。
そういうのは最後まで言わないから意味があるんだ。

「右手に持ってたもんが右ポケットに入ってんの発見したらそりゃ嬉しくて走り出すさ」
「待てぇぇぇ!!!」
「さよなら雄英生、相澤先生によろしくね」
そう言って僕らは闇の中へと姿を消した。
「あああああああああああああああ!!!!!」

うわっ…僕への信頼なさすぎ……？

「早速だが…ヒーロー志望の爆豪勝己くん、俺の仲間にならないか？」
「寝言は寝て死ね」
だろうな、とは思った。
元々体育祭でも見たのだがこの子には確固たる意志が、夢がある。
そんな人間を説得しようと思っても無駄だろう。
だから元々こいつを拉致するのは反対だったんだ。
雄英の名誉を地に落としたいのなら…そうだなもっと弱い奴、緑谷君くらいで良い。
一位の爆豪君が攫われたなら連合が強かったから攫われたと考える人も現れるだろう。
そうなれば雄英の杜撰な管理体制や油断を指摘する人も増えたろうに。
被害者を拐ったのかヒーローの卵を攫ったのかでは考え方が変わってくる。
そういう意味では彼は少し特殊なのかもしれない。
傍目から見れば言動や行動がまるでヴィラン予備軍のようだ。
こちら側に絆されると考える人も現れるのだろうか。
甚だ勘違いもここまでくると滑稽である。
「これ」がヴィランになる？冗談じゃない。
こいつはオールマイトに憧れたんだ。
絶対的な正義を行使する力、それを求めるものがヴィランになどなるはずもない。
むしろ今回僕らを倒して実績を得ようとすら考えるかもしれない。
それがヒーロー（雄英）だ。

あ、雄英の会見が始まった。

出ているのは鼠と筋肉と先生か。

「生徒の安全…とおっしゃいましたがイレイザーヘッドさん、事件の最中生徒に戦うよう促したそうですね。意図をお聞かせください」

「私共が状況を把握できなかったため、最悪の事態を避けるべくそう判断しました」

「最悪の事態とは？２５名もの被害者と２名の拉致は最悪と言えませんか？」

「私があの場で想定した最悪とは、生徒がなすすべなく殺害されることでした」

「被害の大半を占めたガス攻撃…敵の個性から催眠ガスの類だと判明しております。拳藤さん、鉄哲君の迅速な対応のおかげで全員命に別状はなく、また生徒らのメンタルケアも行なっておりますが深刻な心的外傷などは今のところ見受けられません」

「不幸中の幸いだとでも？」

「未来を侵されることが最悪だと考えております」

「攫われた爆豪君や常闇君についても同じことが言えますか？」

「２人とも雄英校に優秀な成績で入学、体育祭でも優勝と三位ととても優秀な成績を収めています。また爆豪君は中学時代にヘドロ事件で強力な敵に単身抵抗を続け、経歴こそタフなヒーロー性を感じさせますが、反面決勝で見せた粗暴さや表彰式に至るまでの態度など精神面の不安定さも散見されています。

もしそこに目をつけた上での拉致だとしたら？言葉巧みに彼をかどわかし悪の道に染まってしまったら？未来があると言い切れる根拠をお聞かせください」

「爆豪勝己の粗暴な行動については教育者である私の不徳の致すところです。ただ、体育祭での一連の行動は彼の理想の強さに起因しています。誰よりもトップヒーローを追い求めもがいている。常闇もまた同じ、心に確固としたヒーロー像を浮かべ日々邁進している優秀な生徒です。

あれを見て隙と捉えたのなら、ヴィランは浅はかであると私は考え

ております」
　随分と惚れ込んでいるんだな、羨ましいことこの上ない。
「根拠になっておりませんが？感情の問題ではなく、具体策があるのかと伺っております」
「我々も手をこまねいているわけではありません。現在警察と共に調査を進めております。我が校の生徒は必ず取り戻します」
　ふむ、まだここは見つかっていないと口に出して明言するか。
　少し不自然だがまぁいい、取り敢えず置いておこう。
「トゥワイス、拘束外せ」
「ええ!?俺嫌だよ！いいぜ！」
　大人しく爆豪、常闇共に拘束を外されていく、２人とも外された瞬間、
　爆豪がトゥワイスを殴り、死柄木に一撃を入れた。
　顔につけていた手が外れ、素顔を晒した。

「ハッ、言ってくれるな雄英も先生も。そういうこったクソカス連合！言っとくが俺はまだ戦闘許可解けてねぇぞ！」
「右に同じ！」

「自分の立場よく分かってるわね…小賢しい子！」
「いや、馬鹿だろ」
「刺しましょう」
「その気がねぇなら懐柔されたふりでもしときゃ良いものを…やっちまったな」
「したくねぇもんはウソでもしたくねえんだよ俺ぁ、こんな辛気臭えとこ、長居する気もねぇ！」

「……お父さん…」
「行けません！死柄木弔、落ち着いて！」
　死柄木が爆豪に向けて殺意を向けたと思うと、手のひらをコチラに

向けて制して来た。
「手を出すなよ、お前ら。こいつは…大切な駒だ。できれば少し耳を傾けて欲しかったな。君とは分かり合えると思ってた」
「分かり合うだ？ねえわ」
「…仕方ない。ヒーロー達も俺らの調査を進めていると言っていた。悠長に説得してられない…先生、力を貸せ」

まずい
「黒霧、ゲート準備」
「は？センジュ一体どうしたと…」
コンコンコン、とドアが鳴る。
「どうもー！ピザーラ神野店でーす！」
ＳＭＡＳＨ!!!!
その瞬間、扉の横の壁から「最強」が姿を現した。
「もう逃げられんぞヴィラン連合、何故って？我々が来た!!」
「…おもしろくないぜ、ヒーロー。相性を考えろよ、なんでシンリンカムイを連れて来たんだ？」
そう言って僕は彼に掌を向けて、ぎゅっと握った。
「あ…がっ…」
彼の個性は樹木、体が木で出来ている。
その制御権を無理やり奪い取った。
「シンリンカムイ!!」
「先輩っがた！俺は気にせず救助を!!優先して！」
そうだね、もう心配しなくていい。
彼の身体を小さなピンポン球ほどのサイズに圧縮させる。
その過程で内臓も何もかも全て潰れて死んでしまったがその質量が消えることはない。
ふむ、重要器官は元の肉のまま、ということか。
その圧縮させたシンリンカムイを指弾の要領で親指を弾いてヒーロー側に放った。
その瞬間、一気に固めていたのを解除する。

濁流のような樹の流れが、ヒーロー側を襲った。
が、オールマイトに全て壊されてしまった。
「仮にもさっきまで生きていた仲間の死体なんだが…よくそんな軽々と壊せるな」
「グゥッ…エッジショット！」
「承知！」
「黒霧！持ってこれるだけ持ってこい!!」
「申し訳ありません死柄木弔！ですが所定の位置に脳無が…いない!?」

あ、黒霧が落とされた。
「きゃー！やだもう何？殺したの!?」
「殺してはいない、少し中を弄らせてもらっただけだ」
次の瞬間には荼毘、スピナーも落とされていく。
「ＳＭＡＳＨ！」
「ははは、随分と手加減してるなＮｏ．　１、周りに被害が及ぶのが怖いか？」
「黙れヴィラン！子供だからって手加減されると思っているのか！」
強い、手加減されてもこれだ。
まともに戦ったら本体を殴られて終わりだろう。
それに小さい爺さんも厄介だ。
火力こそないがかなり早い。
だからまずは逃げの準備だ。
手から種を生み出して投げ、当然避けられるが目的が違うから問題ない。
前に攻撃したと思わせてこっそりマグネに種を投げた。
受け取った彼女はそれを噛み砕き、個性を発動させた。
その磁力の強力さは以前雄英を襲撃した時以上のものだった。
個性増強と身体能力増強二つの効果を備えた種…ようはドーピングだ。
僕の身体から作られたものだから僕には効果はないがそれ以外の

人物には基本効く。
そうして強化された磁力はトガに付与され、彼女の元にヒーローや警察が飛ばされていく。
それを樹木で捉えて首を捻じ切り、全て殺す。
邪魔が入らないよう、全て。
残念ながらエッジショットや爺さんは殺さなかったが邪魔をして来そうな警察はほぼ全員殺した。
「それじゃあ、第二ラウンドだね」
「…クソガキが、命をなんだと思っとる！」
興味ない。大体彼らも死ぬ覚悟で此処に来たんだろう。
なら後悔はないはずだろ。
「黙って死んどきなよ！爺さん！」
鞭のように伸ばし、しならせた腕を振るう。
その威力はビルを崩壊寸前まで追い込むことは容易だったが、軽快な動きをするヒーローには当たることはない。
「先生！助けろ!!」
「いい判断だよ、弔」
なんだ？吐き気がする。
これは、個性か。
「ウッ、ゲェッッ」
口の中から泥が溢れ出す。
気色悪い、普通に汚いな。
泥に身体が沈んでいく。
これは…転送か？
泥を触媒とする転送。
きもっ…きもっ!!
そう思った時にはもう、ヒーロー達は見えなくなっていた。

成り行きな行動は身を滅ぼすってよくわかんだね。

キショ過ぎる。
何だあの泥、口の中から湧いて来たぞ。
というか爆豪君は連れて来たのに常闇君がいないのは何でだ。
オールマイトに連れ去られた？
まあ条件もわからない、発動したと思われる人も目の前に居る。
「…先生……」
「また失敗したね、弔」
また、ということはコイツが連合の裏に居た奴ってことか。
強いな。少なくとも僕よりは。
下手すればオールマイトに並ぶほど。
黒い酸素補給機のようなマスクをつけているがオシャレだろうか。
だとすればその黒いスーツと絶望的なまでに合っていない。
病院服でもきてろや。
「でも決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい、こうして仲間も取り返した。この子も、君もね」
そう言って爆豪君と僕の方を向いた。
え？僕？
「君が大切な駒だと考え、判断したからだ。いくらでもやり直せ、そのために僕が居るんだよ」
全ては君のためにあるんだよ

ふと、上を向いた。
満月で、削げたような周りと相まってとても綺麗に見えた。
オールマイトだ。
やっと来たか。
あの室内での動きが1割程だとするともうすでに着くものだと思っていたが。

「先生」とやらにオールマイトが殴りかかったが、それを手で受け周りには強風が吹き荒れた。
「全てを返してもらうぞ！オール・フォー・ワン!!」
「また僕を殺すか？オールマイト」
「随分遅かったじゃないか、バーから此処まで5キロ辺り。僕が脳無を送り優に３０秒は経過しての到着。衰えたね、オールマイト」
　そういう男の声は喜悦に満ちているようだった。
「貴様こそ何だ、その工業地帯のようなマスクは、だいぶ無理してるんじゃあないか？6年前とは同じ過ちは犯さん。
　爆豪少年を取り返す、そして貴様を今度こそ刑務所にぶち込む！
　貴様の操るヴィラン連合もろとも！」
「それはやることが多くて大変だな…お互いに」
　そう言って男は空気弾を放った。
　その威力はオールマイトを簡単に吹き飛ばし、ビルを何棟も崩壊させるほどのものだった。
「オールマイト！」
「心配しなくてもあの程度では死なないよ。だからここは逃げろ弔、その子を連れて」
　指が黒い触手のようになり、それが黒霧を貫いた。
「ちょっ…あなた、彼やられて気絶してんのよ！よくわかんないけど、ワープを使えるならあなたが逃して頂戴よ！」
　確かにその通りだしそもそも何故常闇は置いて来たんだ？
「僕のはまだ出来立てでねマグネ、転送距離はひどく短い上からの座標移動と違い僕の元へ持ってくるか僕の元から送り出すしかできないんだ。ついでに送り先は人…馴染み深い人物でないと機能しない。だから黒霧にやってもらう。
　個性強制発動、さあいけ」
「先生は…」
　オールマイトが瓦礫から飛び出して来た。
「うおおおおお!!」
　男は予備動作もなく浮いて喋りかけてくる。

「常に考えろ、弔。君はまだまだ成長できるんだ」
「逃さん！」
「いくぞ死柄木、あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めているうちにコマ持ってよ！」
その場にいる全員が爆豪君を見た。
「めんどくせぇ！」
彼は冷や汗をかきながらも表情は笑顔だった。
そういうところがやっぱりヒーローなんだよなぁと、そう思った。
トガやコンプレスが爆豪君を狙って捕まえようとしている時、僕はチラリと瓦礫の方を見た。
人の気配がする。
が、まぁこれだけの被害だ。元々人口の多い地区だし死ななかった幸福な市民だろう。
そう思っていた。
壁が崩れた。
緑谷君達が、また現れた。
氷？僕らへの攻撃手段じゃない。
高く上げただけの障害物にもならない氷。
そう呆けていると彼らがその上を滑って登っていった。
「来い!!!」
ＢＡＮＧ!!!
爆豪君が、これまでとは比べ物にならないほどの速度で飛び出していった。
「どこにでも…現れやがる！」
「逃すな！遠距離ある奴は？」
「茶毘に黒霧がダウン！センジュ！」
「いいよ、コンプレスとトガ、乗って」
そう言ってカタパルト状の射出機を形成する。
先程バーで樹木を圧縮させた要領で反発を活かしたそれは、砲弾のような速度で放出された。
「タイタンクリフ！」

「がぁっ！」
Ｍｔ．レディがそれを顔面で防いだ。
力技だな、
「Ｍｔ．レディ！」
「救出優先…行って、バカガキ…」
「まだ間に合うわ！もう一発お願い！」
「駄目だ、マグネ」
「どうしてよ！」
「爺さんが来た」
そう言ってマグネを樹木で絡めて引く。
その瞬間、先程までマグネの顔があった部分に蹴りが飛んで来た。
「乙女の顔なんだ、傷つけちゃあいけないだろう？ご老人」
「遅いですよ！」
「お前が早すぎんだ、俊典」
「ありがとうセンジュちゃん！」
「大丈夫、取り敢えず彼等は捨て置こう。死柄木、逃げるぞ、マグネトガに」
「りょーかい！」
「待て！先生、その身体じゃあんた…ダメだ！俺、まだ…」
そう言い切る前に彼は闇に消えていった。
「……おや、君はまだ行かないのかい？」
「もしかしてだが、貴方が僕にわざわざ刺客を向けて来たのかい？」
「ふはははは…まさか、そんなわけないじゃないか」
そういう姿は胡散臭く、とても信用できるものではなかった。
「ああごめんね、貴方みたいな狸に聞いたことが間違いだった。もしそうなら感謝を告げようと思っただけさ」
「…感謝、かい？恨みではなくてかい？」
「うん、そのおかげで目標を見つけられた、やりたいことがわかったから。だからありがとう」
そしてさようなら、闇の帝王。
多分だが貴方は負ける。

いや、そもそも勝つつもりのない戦いなのだろう。
負けようが勝とうがどちらでもいい。
だから貴方が幸せになれますように、と祈った。
「ばいばい、先生に宜しくね、オールマイト」

逃げて、逃げて、救えない

オールマイトが引退してから数日が経った。
バーで生活していた頃とは比較にならないほどの見窄らしい生活を続けていた。
だが平和の象徴が倒れた今、勧誘を止めることはできない。
茶毘やトゥワイスが特に勧誘を行なっている。
そして、トゥワイスがペストマスクをつけた男を連れてきた。
「見るからに不衛生だな。ここが拠点か？」
「ああ！いきなり本拠地連れてくかよ。面接会場ってとこ」
「勘弁してくれよ、随分埃っぽいな…病気になりそうだ」
「安心しろ、中の奴らはとっくに病気だ」
不満を漏らす男に対し、トゥワイスは倉庫の扉を開けながら説明をした。
倉庫の中には茶毘に黒霧、死柄木などの連合メンバー全員が揃っていた。
「話してみたら意外と良い奴でよ!!お前と話をさせろってよ！感じ悪いよな!!」
「……とんだ大物、連れてきたな…トゥワイス」
トゥワイスが死柄木を指差しながら言うと、死柄木は僅かに口角を吊り上げた。
すると男が不満を漏らす。
「大物とは…皮肉が効いてるな、敵ヴィラン連合」
「何!?大物って有名人!?」
「先生に写真を見せてもらった事がある。いわゆる筋者さ。『死穢八斎會』、その若頭だ」
マグネが尋ねると、死柄木が答える。
若頭にしても若すぎるほどだとは思うが。
精々２０代後半程度だろう。
「極道!?ヤダ初めて見たわ、危険な香り！」

「私達と何が違う人でしょう？」
「よーし、中卒のトガちゃんにおじさんが教えてあげよう。昔は裏社会を取り仕切る恐ーい団体がたくさんあったんだ。でも、ヒーローが隆盛してからは摘発・解体が進みオールマイトの登場で時代を終えた。尻尾を掴まれなかった生き残りは、敵ヴィラン予備軍って扱いで監視されながら細々生きてんのさ。ハッキリ言って時代遅れの天然記念物」
　トガが尋ねると、Ｍｒ．コンプレスが答える。
　完全に煽りに入った口調だったが、意外にも男は特に反応を見せることはなかった。
「まぁ、間違っちゃいない」
「それでその細々ライフの極道くんが何故ウチに？あなたもオールマイトが引退してハイになっちゃったタイプ？」
「いや…ヒーローよりもオールフォーワンの喪失が大きい。裏社会の全てを支配していたという闇の帝王…俺の時代じゃ都市伝説扱いだった。だが老人達は確信をもって畏れてた。死亡説が噂されても尚な。それが今回実体を現し…監獄へとブチ込まれた。つまり今は、日向も日陰も支配者がいない。じゃあ次は、誰が支配者になるか」
　男が言うと、死柄木は不機嫌そうに答える。
「……ウチの先生が誰か知ってて言ってんならそりゃ…挑発でもしてんのか？次は俺だ。今も勢力を掻き集めてる。すぐに拡大していく。そしてその力で必ずこのヒーロー社会をドタマからブッ潰す」
　すると、オーバーホールが死柄木に尋ねる。
「計画はあるのか？」
「計画？お前さっきから…仲間になりに来たんだよな？」
「計画のない目標は妄想と言う。妄想をプレゼンされてもこっちが困る。勢力を増やしてどうする？そもそもどう操っていく？どういう組織図を目指してる？ヒーロー殺しステインをはじめ、快楽殺人のマスキュラー、脱獄死刑囚ムーンフィッシュ、どれも駒として一級品だがすぐに落としてるな？使い方がわからなかったか？イカレた人間十余人も操れないのに勢力拡大？コントロール出来ない力を集めて

何になる。目標を達成するには計画がいる。そして俺には計画がある。今日は別に仲間に入れて欲しくて来たんじゃない」
「トゥワイス…ちゃんと意志確認してから連れて来い」
男が言うと、死柄木はトゥワイスに文句を言った。
すると男が提案してくる。
「計画の遂行に莫大な金が要る。時代遅れの小さなヤクザ者に投資しようなんて物好きはなかなかいなくてな。ただ名の膨れ上がったお前達がいれば話は別だ。俺の傘下に入れ。お前達を使ってみせよう。そして俺が次の支配者になる」
「帰れ」
オーバーホールの提案を死柄木は却下した。
すると、マグネが布に包まれた巨大棒磁石を取り出して構える。
「ごめんね極道くん。私達誰かの下につく為に集まってるんじゃあないの」
マグネが個性を発動すると、オーバーホールが巨大磁石に引き寄せられる。
「こないだ友達と会ってきたのよ。内気で恥ずかしがり屋だけど、私の素性を知っても尚友達でいてくれた子。彼女言ってたわ。『常識という鎖に繋がれた人が繋がれてない人を笑ってる』、何にも縛られずに生きたくてここにいる。私達の居場所は私達が決めるわ!!」
そう言ってマグネは男の頭を磁石で殴った。
その瞬間、男は左腕を振りかぶった。
「マグネ!・離れろ!」
久しぶりに出た声だった。
大事な物を取られたくなかった。
だが間に合わない。
マグネのその早すぎる判断力、行動力が悲劇を生んだのだ。
左手の指先でマグネの左腕に触れる。
すると次の瞬間、マグネの上半身が消し飛んだ。
それを見ていた４人が目を見開き、マグネの血がボタボタと落ちる。

「先に手を出したのはお前らだ」
「マグ姉ー!!!?」
男が血を浴びながら立ち上がるとトガが叫ぶ。
服に血が付いた男は、不快そうに服を擦っていた。
「ああ汚いな…!!これだから嫌だ」
すると、Ｍｒ．コンプレスが男に飛びかかる。
「待てコンプレス!」
Ｍｒ．コンプレスは、男を圧縮しようとした。
だが、左肩を何かで撃たれ〝個性〟が発動できなくなる。
Ｍｒ．コンプレスの左手の指先が男の左腕に触れると、男は顔に蕁麻疹を発生させてＭｒ．コンプレスを睨む。
「触るな」
そして、そのまま手を払い除けるとＭｒ．コンプレスの左腕が吹き飛んだ。
「ってええええ!?」
Ｍｒ．コンプレスが尻餅をつきオーバーホールが腕を擦っていると、死柄木がオーバーホールに触れて身体を破壊しようとする。
すると、オーバーホールが咄嗟に叫ぶ。
「盾っ」
その直後オーバーホールの前にペストマスクの男が現れ、代わりに男の身体が破壊される。

「うぐっ…!」
「危ないところでしたよオーバーホール」
すると弾丸のようなものが飛んできたため、死柄木は大きく後ろへ跳んで回避した。
「なるほどーーー…ハナからそうしてりゃ幾分わかりやすかったぜ」
すると、倉庫の壁を破壊してペストマスクの男達が現れる。
「待て、どこから!!尾行はされてなかった!!」
「大方どいつかの個性だろう」
「遅い」

「一発外しちゃいやした…しかし即効性は十分でしたね」
オーバーホールと呼ばれた者の横に立つ男は、Ｍｒ．コンプレスを撃ったと思われる拳銃を持っていた。
「穏便に済ましたかったよ、敵ヴィラン連合。こうなると冷静な判断を欠く。そうだな…戦力を削り合うのも不毛だし、ちょうど死体は互いに一つ…キリもいい、頭を冷やして後日また話そう。腕一本は負けてくれ」
「てめぇ殺してやる!!」
「弔くん、私刺せるよ。刺すね」
トゥワイスとトガはマグネとＭｒ．コンプレスの仇を討とうとする。
だが、死柄木は二人をを止めた。
「……駄目だ」
「責任取らせろ!!」
スピナーがそう叫ぶ。
「賢明だ、手だらけ男」
「すぐにとは言わないが、なるべく早めがいい。よく考えてみてくれ…自分達の組織とか色々…冷静になったら電話してくれ」
そう言ってオーバーホールとその部下たちは去った。
彼らの連絡先が記された名刺を残して。

マグネを殺されたというのに僕は怒り狂ったりはしていなかった。
どんどん自分が変わっていく気がする。
僕は僕のことが嫌いなのかも知れない。
僕はマグネのことを気に入っていたはずだったんだけどなぁ、と考えた。それはたぶん、恋愛感情とかそういうものではなくて、たとえば、仲の良い友達に対する好意に近いものだったんじゃないかと思う

けど……。
いや、どうだろう？　わからない。
僕は自分の気持ちが自分でもうまく理解できないでいた。
「……」
まあ、いいか。
そんなことは今さら考えても仕方がないことだ。それよりも今はもっと大事なことがある。
そうやってすぐに切り替えられらところは僕の美点なのかも知れない。少なくとも、あの逃げ出した日と逃げるために決意した日に、僕の中で何かが決定的に変わってしまったことだけは間違いないのだけれど、その変化に対して、僕は驚くほどあっさりと順応してしまっていた。
それはそれで問題なのかな、とも思う。

遠くで誰かが僕を呼んでいる。
おいでおいでと呼ぶ声の裏で嗤いが隠されているような気がした。
そんな夢を見た。